

に振る。

「次の八呼間」手足を交代し、右手右足を前出して同様の動作を行ふ。

「にほひをおくつて笑ひます」。「にほひを送つて」で互に兩手をつないで左に一廻りし、「笑ひます」の時にとまつて、向き合つたまゝ互に兩掌を七回たゞき合せる。

二節

「咲いたくたんぼぼが」一節と同動作を行ふ。

「垣根のそばのたんぼぼが」一節の「黄色のお顔をそつと出して」と同じ動作。

「てふくさんをやすませて」互に左手をつなぎ、右手を伸ばして上下に軽く振りながら、左に一廻りする。

「次の八呼間」右手に握りかへ、左手を伸ばして上下に軽く振りながら、右に一廻りする。

「二人で仲よく話します」一節の「にほひをおくつて笑ひます」と同じ動作を行ふ。

櫻のトンネル 日本幼稚園協會發行、幼稚園唱歌選集所載。

「櫻のトンネル母様と、くゞつて楽しい幼稚園」一列圓形を作り、圓周上任意の二人が左右を向いて向き合ひ、兩手をつないでトンネルを作る。そのトンネル生を中心にして圓周を二側に分け、各側共、トンネル生の方をむく。そしてトンネル生の隣生を先頭に、兩側同時に、外側より二列になつてトンネルをくゞり真直ぐ進む。トンネル生は、最後につゞく。全生がくゞり終つた時、二列縦隊が出来る。

「昨日のやうに思へるが」二列のまゝ向き合つて、各列、互ひに隣生と連手し、後力に開いて再び一列圓形をつくる。

「もう一年もたちました」始めの二呼間拍手をして、次の二呼間に、掌を反して兩手を擴げると同時に、踵をつけて、足尖を上げ、左足を前出する。この動作を左右の足、交互に四回行ふ。

「明日から大きいお室です」全生兩手を伸ばして肩の高さに上げ、駆足で圓周を左に進む。

「あゝうれしいな」四呼間、そのまゝ左に駆足で進み、次の四呼間、立ち止つて、その方向に向つて、やゝ體を前傾し三拍手する。

「うれしいな」今の動作を、右の方向に行ふ。

觀察

清水 光子

幼稚園も三月の聲をきくといろ／＼な行事が多いからその楽しみに壓倒されて落付いた幼稚園生活がまたげられない様に氣をつけ度いものである。

芽 北國や山國の雪はまだ深いかも知れないけれど暑さ寒さも彼岸までとやらで春の足音がそこにきこえてゐる三月、木や草の芽が、氣がついて見ると驚く程大きくなつて、あるものは綠色にさへなつてゐる。「こんなに芽が大きくなつてゐるのね」と子どもに知らせてみせる。この木も、あの木もといふ風に、又花壇の草の芽もみる。そして小さいけれど強いとはいふ芽、これから伸び

て花になつたり葉になつたり枝になつたりする芽を大事にして、ふんだり、むしつたりしないやうによく注意する。

手品遊び 會といふのも大げさだけれど、子ども達と楽しい集りをする機會の多いこのごろ、何か簡単な手品をするのも面白いことであらう、觀察とは言へないかも知れないけれど、不思議を感じ、究明し度い氣持を起させる機會といふことでは意味があると思ふ。出来るなら種明しのできるもの、簡単な物理化學の應用のやうなものがよいであらう、よく知られてゐる數例をあげると、小さい紙で大きいものを巻くこと(途中を切らないやうに細く長くきつて)ひもつなぎ空徳利から水を出すこと、コップにうつして水の色を變へること、あぶり出し、玉落し(コップを三四個竝べ、一枚の紙でふたをしておき一つ一つの上に玉をのせておいて紙のふたを早く抜き取つてコップ銘々に玉を入れること)皿まわし等がある。大人の前でする失敗より子ども前でする失敗の方がいけないからよく念を入れて用意してする事にし度い。

談 話

志村 貞子

もう三月といふ月を迎へる。吹く風にも日ざしにも樹々の枝にもどこか春の息吹の感じられる此の頃である。戦ふ祖國の戦ふ國民の一人として此の冬の嚴しい寒さを、兵隊さんに負けない元氣で楽しく激刺と凌いで来た、否、勝ち抜いてきた頼もしいよい子たちにとつてもこの月を迎へるよるこびは亦格別である。桃のお

節供がある、國民學校へあがる日が近づいてくる。大きい組(年長組)になる日が一日一日と近くなる、三月である。それは子供達にとつてお正月を待つ喜びに負けない大きな喜びなのである。

此の月の談話にも先づ「三月節供の話」とある。

二月の半頃から色紙で、或は新聞粘土でいろ／＼可愛い、お雛様を皆でたのしく作つて待つたお節供、屏風や櫻や橘も、お雛様にあげるおいしさうな菱餅や御馳走もすつかり出来上つた此の頃である。雛祭の故事について先生が一通り知つておかれる事は必要であるが、お節供の話としてそれをきかせる必要はない。むしろ次の「花子さんとお節供」のやうに童話として扱つた方がよいと思ふ。たゞ雛祭が日本の昔からの行事である事を、お母様もお祖母様も楽しまれたお祭りであることを、お雛様を作りながら、或はまた飾りながら自然のうちに話してきかせたいものである。

「花子さんとお節供」は、倉橋先生が附屬幼稚園の園児たちにお節供の集りの時お話して下さつたお話で幼稚園談話集第二輯にいただくことになつてゐる。先生のお話の御聲、子供達の喜ぶ聲、赤い毛氈、典雅なお雛様すべてが忘れられない楽しい集りである。

「冬から春へ」春を待つ生物、例へば樹の芽、草の芽の童話を創作して生物の春への誓み、喜びを、亦それを育む自然の大きな力を話の中へ織込んで聞かせるのもよいであらう。亦子供達と語りあつてみるのも面白いと思ふ。或子供はお池の水が薄くなつたといふだらう。風が暖かくなつたといふかもしれない。又或子供はもうすぐ國民學校へあがるといふことに春のよるこびを一ばいに感じてゐるかもしれない。また雪合戦をしたいなあ冬遊び